

中学生の攻撃性を引き起こすメカニズムに関する検討

— ストレス対処と自己効力感の視点から —

江崎 真理

I. 問題・目的

窓ガラスを割る，カーテンを切る，壁をける—小中高校生が学校で物を壊した件数が1998年から1999年にかけて4割も増えていることが報告されている。様々な学会で攻撃性や暴力が取り上げられ，人びとの関心を集めている。学校・社会における，他者に対して意図的に心理・身体的危害を加えることの増加・若年化・一般化が叫ばれ，非行の第4のピークが到来したと言われる。

一般化してきていると同時に最近，子ども達の「荒れ」の様子が変わってきていると言われている。どの子どもの中にもごく一般的に，いつ爆発してもおかしくないような，抑圧された感情がある。その感情がだんだん深まり，切迫感を強めている。「うざったい」とか「むかつく」とか，身体感覚で表現しているような，不快感，被抑圧感といったものの混じり合った不安や苛立ちの感情の鬱積が，ちょっとしたことでいきなり爆発するといった印象を受ける。ある意味で学校の縛りよりも家族の縛りのほうがきつくなっていて，期待される良い子の枠から逸脱しない様に適応していれば大人から承認・受容されるので，とりあえずは本当の自分を殺して仮に良い子をやっているが，その仮の生には空虚感しかない。子どもは家でいい子にしている，そこでたまったストレスを学校の管理の間で発散している様子である。家庭の中で，自分のやりたいことを存分にやれない，ゆっくりと成長を見守ってくれる人間関係をもちにくい，そんな虚しさで本当の自分への希求，渴望感を表現していると思われる。発達の上で小5・6年生から親離れが始まる。中1・2になると青年期前期と言われ，自我意識が発達し，自分のイメージ，自己愛，表面を気にする，グループ行動をとることで安心したり，客観して言葉で語ることが難しかったり，親を批判的な目で見られるようになったり，自己を作っていくため，親と距離をとりたがる。第二次性徴の出現により，子どもは児童期の自己イメージをもてなくなる。同時に両親，特に母親から距離を取り始める。その代わりにこの年代では，同年代の同性の親密な友人関係が重要に感じられる。前青年期からこの時期にかけての同性の特定の友人との関係が，きわめて重要な発達の意義を持つことは，よく知られている。中3・高校では青年期中期と呼ばれ，客観して言葉で語ることができるようになる。そして，自我意識過剰になっ

たり，秘密・親密さを保持したりするようになる。両親への愛着は弱まり，自己への関心が増大する。自己を過少にもしくは過大に評価する傾向があらわれる。依田(1940)は，青年期は生理的成熟ならびに身体の急激な発育に伴う“力”の意識によって，自我意識が著しく昂揚され，わがまま，冒険，名誉欲あるいは羞恥心が表れる。特に親の共生，干渉に対する反抗が多くみられるのは，親の行動が圧迫や束縛を感じさせるためと言っている。

本研究では中学生を対象として，攻撃性の内的メカニズムを探ることを目的とし，認知や対処行動を変えることで攻撃性を処理できるかということに最終的な焦点を合わせて，どのような働きかけが出来るかの情報を得られるようにする。

II. 研究1

<目的>攻撃したい気持ちを感じた時の出来事の認知や感情の推移を調査し，より具体的に中学生の攻撃性が発生する場面を捉える。

<方法>名古屋市立中学校の1・2・3年生2クラスずつ175人を対象として質問紙調査を行った。質問紙は攻撃したい気持ちを感じたときのエピソードについて頻度，対象，攻撃衝動と行動，気持ちの変化，伝達度，全体的評価等に回答を求めた。

<結果・考察>多くの被験者は1週間に平均2回程度の気持ちを経験している。男女とも同性を対象として選ぶ率が高く，家族や友人・知人など，被験者にとって親しい人々が怒りの対象になりやすいことが示されている。被害自体の大きさよりも加害者の行為が不合理であるかどうかの判断によって攻撃したい気持ちの強さが決まる。そして，身体的・物質的被害よりは心理的被害によって気持ちが生じている場合が多い。「いらいら」感が多く，負の感情は内に向くよりも，外に向くことが多い。衝動的な方が思考している人より多く，身体的攻撃より言語的攻撃の方が多い。願望段階より実行段階が低く，したいことが出来なかったという評価が残っている方が高い。またそのため，積極的に相手に伝える行動がとれない。相手が自分の気持ちに気がつかなかった方が多く，自分の伝えたいことが伝わらなかったと感じる方が多い。かなりの数の被験者が相手との関係において大きな不全感

を抱えていると言えよう。相手の気持ちによる自分の気持ちの変化よりも、自分の行動による自分の気持ちの変化の方が大きく、このことはまだ感情が相手との間で起こったことであるとしても、その後の対処は相手との間で解決していくものというよりは、自分の中で処理していくものと捉えられていると考えられる。中学生では、より自己中心的な世界にいると思われる。また、憂うつになったり恥ずかしくなったりといった、自分を責めることよりは、腹が立つというように相手側を責める方が多かった。

Ⅲ. 研究2

〈目的〉自分の行動や感情への肯定的な評価の出来なさや不全感を自己効力感の低さの視点から捉え、中学生について問題となっているストレス、ストレス対処の仕方もとり入れて、攻撃性とストレス、自己効力感、ストレス対処という枠組みから攻撃性について検討することを目的とする。

〈方法〉対象は主に中学生（名古屋市内の4中学校261人）とし、発達の比較の参考のため小学、高校、大学での調査も行った。質問紙は、日常的ストレス尺度、対処可能性尺度、対処方略尺度、自己効力感尺度、攻撃性尺度、内的外的統制尺度からなる。

〈考察〉自己効力感とストレスと回避的対処を3要因とする分散分析の結果から、自己効力感が低い人ほど攻撃性が高まることが示唆された。自己効力感が低い人は、自分の行動が結果に影響をもっていると思えることが少なく、自分の行為が結果に余り影響しないと考える人である。結果が自分の影響外にあると考えることは、個人のイライラ感や敵意的な見方を高める方向に働くと考えられ、その結果、攻撃性として今回取り上げた易怒性や敵意性を高めたと思われる。安香(1998)は非行の変質に即した行為者の心象特徴として、否定的要因の存在ではなく、肯定的要因の不在性と結論づけている。つまり、過去の体験について自分が何らかの力を及ぼしているとは考えられず、自分の力に関係なく決まっているといった感じ方をしていると思われる。自己効力感とは、自分の力のある意味積極的に認める感覚であると思われ、それがこの肯定的要因となりうるものであり、これが足りないことが攻撃性を高めると言えよう。また、ストレスが高いほど、そして回避的対処が高いほど、攻撃性も高いことが示唆された。回避的対処をすることで、一次的には心理的ストレスは避けられると思われるが、問題中心の積極的な解決は不可能になり、そのことは結局

ストレスの積み重ねになったり、自分の効力感を上げることができなくなったりしてしまうことにつながると思われる。そのため攻撃性が高まるとされる。

各変数の平均得点を発達段階で比較したところ、自己効力感を除く全ての変数において、小学校から中学校への変化が有意に高いことが示された。攻撃性は中学で最も高い値が示され、それから下がっていくのだが、小学校から中学校への変化はかなり著しいものである。全変数の中には、攻撃性を抑えると考えられるものも含まれているが、ストレスも攻撃性も同じように小学から中学へ急に高く上がってしまっており、さらに自己効力感が小学を先頭に、それから低くなるという流れになっていた。

Ⅳ. 全体的考察

本研究では、一般中学生に見られる攻撃性がどのようなメカニズムで引き起こされるかについて検討した。

本研究の結果をもとに、ストレスの攻撃性との関わり、自己効力感の攻撃性との関わり、回避的対処の攻撃性の関わりについて関連があるということが示された。また、発達の視点からも、小学から中学への変化は大きいことが明らかになり、ストレスや攻撃性などは増え、自己効力感については低くなっていることによって、さらに攻撃性が加速されるのではないかとされる。内的外的統制には変化が見られないにもかかわらず、自己効力感が低くなっていることから、漠然とした考え方については顕著な変化は見られないが、実際自分がとる行動への動機付けについて考えると、積極的な姿勢は弱くなってきていると言えよう。それは、自己効力感の低さから来るものでもあり、達成しない体験の積み重ねによって効力の期待が高まらないからと言える。よって、自己効力感を高めていく働きかけが必要と思われるが、小さな目標から達成感をつけていき、効力感を高まらせ、その高まった効力感で新しいことに挑戦していくという良い循環を作り出せたらと思う。また、すべての中学生に自己効力感が有効とは言えず、自己効力感が高いにも関わらず、ストレスが高い群においては攻撃性が高まるため、対処方略を身につけるなどのより現実的な働きかけが攻撃性を抑えるのに有効と思われた。また、発達段階によっても対処の仕方について働きかけた方がいいものと、自己効力感を高める働きかけが有効な時が分かれており、発達や本人の状態に即して働きかけを変えていく必要があると思われる。